

早稲田商学第 431 号
2012 年 3 月

天野為之と「マクロ経済学」の形成

——経済学史上の再評価——

池 尾 愛 子

1. 天野の経済学を再評価する

天野為之（1859–1938）は彼の『経済原論』（1886）により、「日本における経済科学の創始者」（岡田 1975; 宮島・花井 2004）として位置づけられていたものの、経済学史一般の上では依然としてその研究・評価は不十分であった⁽¹⁾。しかし2006年、国立国会図書館の近代デジタルライブラリーに天野の著書・訳書・講述書のかなりの部分が掲載され始めたおかげで、誰でも彼の広範な著述に触れられるようになり、彼の先駆性を再評価する機会が到来していたのである。本稿では、天野が「経済学の必要」（1886）や『経済原論』（1886）において、イギリス古典派経済学者達の「生産的消費」と「不生産的消費」の区別に不満を表明していることに注目し、そして、これらよりさらに発展を遂げた『経済学綱要』（1902）に光をあてることにする。天野の経済学は1902年には、J. S. ミル『経済学原理』（初版1848, 第7版 1871）を土台にしながらも、「経済学とは財の生産、分配、交換、消費を論ずる科学なり」と捉え、効用、資本の増

(1) 本稿は、池尾（2011a）の改訂版である。佐賀での発表の際、コメントや質問を下された方々に感謝する。宮島・花井（2004）は、市販されていない『早稲田大学商学部百年史』（2004）に収録されており、商学部以外の研究者にはアクセスが困難である。それに対して、岡田（1975）は大学リポジトリで電子公開されてから、外部アクセスが格段に容易になった。

分（投資）、貯蓄、交易、通貨・銀行、政策（政府の役割）、財政の議論も含められ、「マクロ経済学」と呼びうる内容になっていた。

その背景には、天野が近代的銀行制度や手形交換所、証券取引所の社会的機能を理解することに、大きな関心を寄せていたことがある（天野 1886b, 1890b）。加えて、グラムリッヒ-岡とスミッツ編集の『近世日本の経済思想』（Gramlich-Oka and Smits eds 2010）によって英語でも明らかにされたように、近世やそれ以前の日本社会において、貨幣、市場、信用・金融（融通）という近現代の因子が定着しており、政治改革の名のもとに経済政策や債務救済が実施されていたことも重要である⁽²⁾。ラヴィナ（Ravina 2010）が「儒学的銀行業」と呼んだ村落内での穀物や資金の融通（中井竹山のアイディアに基づく「社倉」）は、小林（1989）では「常平倉」「義倉」と並べて、日本的保険思想の祖型「相互救済と備荒儲蓄」として論じられていた。加えて大谷（2012）は、江戸時代の廻船業において保険概念（請負）が見られたことを紹介した。また、Shaede（1989）や Wakita（2001）は、堂島の米穀取引所における先物取引が、米シカゴの商品取引所に先駆けていたこと、そしてその米穀データの質が良かったことをそれぞれ示している。良質の経済データについては、16世紀の豊臣秀吉の太閤検地まで遡ることができる（Ichimura 2010; Ikee 2011）。

後に石橋湛山が述べた様に、天野の『経済原論』は、政策論である『商政標準』（1886）、『経済学研究法』（1890）とともに、天野の経済学体系の3本柱をなすといってよい。経済学の定義それ自体、そして「均衡」（equilibrium）や「景気循環」（business cycle）など全く未知だった諸概念については時間をかけて

(2) 日本では19世紀になって西洋思想の解釈（翻訳）や受容が始まるが、Gramlich-Oka and Smits (2010) は、西洋思想の影響が及ぶ以前の江戸時代及びそれ以前からの経済思想の展開について、概ね平易な英語（20世紀に定着した経済英語）で表現する論文集である。ドイツ、アメリカ、チェコ、日本の日本研究者達が共同研究を重ね、2008年に独チュービンゲン大学で、2009年に米コロンビア大学で、国際会議を開催して刊行に至った、近世日本の経済思想史についての待望の英文研究書である。

把握していくことになった。『中央学術雑誌』連載の「銀行原理」(1886),『経済原論』,『経済学研究法』,さらに『銀行論』(1890),『勤儉貯蓄新論』(1901),『経済学綱要』(1902)を見ると,天野の経済学は銀行論を組み込んで進歩するとともに,簡明になっていく様子が見て取れる。あと数学記号を用いた表現が採用され,銀行の信用創造の説明が加わっていれば,天野の経済学は現代的マクロ経済学の姿に相当近づいていたことが明らかになる。だからこそ,若き天野に英語を教えた高橋是清も,天野経済学で育った石橋湛山も,イギリスのJ. M. ケインズの『雇用,利子及び貨幣の一般理論』(1936)の出版前に,ケインズの革命的マクロ経済理論の要点(貯蓄のパラドックス等)を把握したのである。

日本の経済学者達の貢献を無視するような経済学史観が広がることを防ぐために,天野研究に着手したところ,幕末・明治期についての研究は種々の理由のため当初予想したより進んでいなかったことがわかってきた。というのも,天野は1923年9月1日の関東大震災で被災し,前年4月に落成した彼の自宅が全焼したのであった。彼は10日ほど勤務先の早稲田実業中学(現在,早稲田実業学校)に宿泊した後,知合い宅,借家に移っていく。彼の状況を鑑みれば,明治・大正期の図書・資料の多くも,この時の火災により焼失したことであろう。それだけに,残った資料を丹念にたどった浅川榮次郎・西田長壽の評伝『天野為之』(1950)は,天野研究にとって極めて貴重である。そして,『経済原論』は天野の生誕百周年を記念して1961年に初版の複製が行われたものの,市販はされなかったようで早稲田以外では入手困難であった。『商政標準』,『経済学研究法』,『勤儉貯蓄新論』までは後の歴史家に言及されることがあっても,『経済学綱要』(1902)に至っては忘却されていたかもしれない。

幕末・明治期についての熱心な研究が,多くの歴史家たちによって現在進行中であることも次第に明らかになってきた。上述の国立国会図書館の近代デジタルライブラリー事業は2000年に着手され,明治・大正期の書籍のうち,著作

権切れが確認されたものを電子的に提供するものである（国立国会図書館2006）⁽³⁾。さらに、天野の経済学を理解するためには、イギリスでの経済学や経済論議の展開だけではなく、アメリカでの経済学や経済学教育の展開にも注意を払う必要がある。それゆえ、経済学史研究の観点からの調査、考察の結果を提供することには、進行中の種々の研究に刺激を与える意義があるのではないかとと思われる。

第2節では、天野研究の歴史を振り返り、天野の著書を論じる準備とする。第3節では、天野経済学の形成を論じるが、天野は制度変化の著しい幕末から明治初期に勉学を進めたので、その環境変化を明らかにして天野のポジションを把握していくことになる。その上で、『経済学綱要』（1902）から「マクロ経済学」のエッセンスを抽出して、高橋是清と石橋湛山の「ケインズに先行するケインズ理論」を再確認する。第4節では、天野の再評価及び関連する時代の研究が大きく進展することを祈って締めくくりたい。

2. 天野研究の歴史を振り返る

——外堀を埋めつつ、天野の著書を読む

天野為之については立派な研究史が存在する。彼の同世代や彼より若い人たちだけではなく、歴史家達がどのように天野を捉えていたかについても、いま新たに天野研究に着手するにあたっての重要な史料となる。天野の著述を直接論じる前に、いわば外堀を埋めていくような作業をすることによって、明治期の経済学者を研究していくことになる。実際のところ、本節での周囲と歴史家の見解について展望作業と、次節での検討作業については、両節を行ったり来たりしながら行うことになった。表1は、天野と交流のあった人たち、同世代人、天野が読んだ経済書の著者たちを生まれた順に並べたものである。

(3) 天野の『経済学研究法』は面白いことに、デジタル画質が良ければ、コンピュータ画面上でも読みやすい組み方であったといえるだろう。

表 1：天野為之と交流した人物および同世代人

福沢諭吉 (1834－1901)		John Stuart Mill (1806-1873)
大隈重信 (1838－1922)		Leon Walras (1834-1910)
渋沢栄一 (1840－1931)		William Stanley Jevons (1835-1882)
		Carl Menger (1840-1921)
		Alfred Marshall (1842-1924)
前田正名 (1850－1921)		James Laurence Laughlin (1850-1933)
		Knut Wicksell (1851-1926)
小野 梓 (1852－1886)	W	John Neville Keynes (1852-1949)
高橋是清 (1854－1936)		
田口卯吉 (1855－1905)		
天野為之 (1859－1938)	W→東	
高田早苗 (1860－1938)	W	Max Weber (1864-1920)
山崎覚次郎 (1868－1945)	(W)	Gustav Cassel (1866-1944)
福田徳三 (1874－1930)		
三浦鍬太郎 (1874－1972)	W→東	
高田保馬 (1883－1972)		Joseph A. Schumpeter (1883-1950)
石橋湛山 (1884－1973)	W→東	John Maynard Keynes (1883-1946)
赤松 要 (1896－1974)		
中山伊知郎 (1898－1980)		Martin Bronfenbrenner (1914-1997)

W：早稲田 東：東洋経済

では、天野為之についての論評や研究を展望していこう。

2.1 福田徳三、天野を評す

まず見るべきは、福田徳三の天野評である。福田は日本の経済学史上、忘れ難い「巨星」であり、小泉信三、赤松要や中山伊知郎など多くの経済学者達を、慶應義塾や東京商科大学（一橋大学）から輩出させたことでも有名である（上久保 2003; 池尾 2006; 2008）。彼は東京高等商業学校で天野から経済原論を学んでいたと思われる。その福田が最初に、明治前期の三大経済学者として、福沢諭吉、田口卯吉、天野為之の3人を挙げたのであった。

明治時代に入ってから……本流として西洋の経済学を日本に移入するに功勞あつた人々としては第一に福沢諭吉氏、次に田口卯吉氏、更に天野為之氏の三氏を挙げべきであると思ふ。福沢、田口、天野の三氏は西洋の経済学、殊に英米の経済学を日本に移植する上に忘るべからざる功勞を為した人である。……天野氏は経済学の奥行きを深くし、其の幅を広くし、学者として経済学を教へ普及した点に於て彼の功績は實に偉大であつた。

(福田 1927: 28-29)

次節でも見るように、日本語で経済原論を講義し執筆することによって、既に経済学の「移植」ではなく「改良」が始まっていたことは強調しておこう。福田がこのように天野を評したのは、1927年、「田口全集の刊行に際して——福沢・田口・天野と明治の経済論——」と題する一文を、「日本のアダム・スミス 明治の新井白石」と宣伝された田口卯吉の全集全8巻が出版される折に、雑誌『我等』に寄稿した時であつた。田口全集の各巻のテーマは、①史論及史伝、②文明史及社会論、③経済上篇、④経済下篇、⑤政治、⑥財政、⑦金融、⑧随筆及書簡であり、解説者は、黒板勝美、福田徳三、河上肇、吉野作造、長谷川萬次郎、櫛田民蔵、大内兵衛であつた⁽⁴⁾。田口はとりわけ『東京経済雑誌』(1879年創刊)の編集でよく知られていた。いわゆるロンドン『エコノミスト』(*The Economist*, 1843年8月創刊)を読んでいた人々は日本でもかなりいたようで、その成功に刺激され、『エコノミスト』誌の日本版を刊行したいとの思いから出発したのであつた⁽⁵⁾。さらに、松野尾(1996)が注目した経済学協

(4) 顧問は洪沢栄一、阪谷芳郎、佐々木勇之助、刊行会代表者は田口文太、編集顧問は久米邦武、伴直之助、鹽島仁吉、編纂者は高野岩三郎、長谷川萬次郎、森戸辰男、田口武次郎であつた。川崎(2011ab)も参考になった。

(5) 中村(1998)、老川(1998)、杉原・岡田編『田口卯吉と『東京経済雑誌』』(1995)参照。しかしながら後に、経済ジャーナリズムでは、天野が田口のライバルとして活躍するようになり、『東洋経済新報』が伸びていくことになる。『東京経済雑誌』の版元経済雑誌社は、1923年9月の関東大震災のあと、同誌9月1月号を最後に廃業する。

会（田口主宰）には、天野だけではなく、大隈重信が参加することもあった。

何といっても、明治期の知識人にとって、田口卯吉の経済記事や福沢諭吉の書物は必読文献であったことを忘れてはならない。そして天野自身、経済雑誌の刊行に熱意をもって取り組んでいたことから判断して、同時代の文献は渉猟していたに違いない。しかし、天野は自分が読んだ洋書・資料（英文）は自著の参考文献として挙げる一方で、雑誌論文・和文献についてはほとんど挙げていない。日本語での知識・議論は出典に言及することなく使っても差し支えなかったようで、それらはあたかも公共財産（public domain）であるかのように取り扱われていた事実注目すべきである。参考文献に挙げていないからといって、日本語文献を読んでいなかった、ということは決してないのである⁽⁶⁾。

2.2 三浦鍬太郎、天野を偲ぶ

次に、三浦鍬太郎が恩師天野為之の77日の命日（忌）に展覧した一文がある。既述のように、天野は経済雑誌の刊行に情熱的に関わってきた。天野は1889年2月に『日本理財雑誌』を創刊するも、同年12月には廃刊するという経験をした⁽⁷⁾。しかし、1895年1月には『東洋経済新報』の創刊とともに客員となり、同誌の刊行が軌道に乗っていくに際して大いに活躍したのであった。三浦鍬太郎は早稲田で天野の講義を聴き、卒業後、東洋経済新報社に就職していた。

三浦の「天野為之先生を偲ぶ」（1938）は、天野の講義の様子、経済学の概観、経済学と与する姿勢を伝えてくれる。

(6) 池尾（2006: 44-45）では日本の大学に、他人の貢献や見解と自らの貢献や見解を区別して学術論文を執筆できるような経済学者達が登場したのは、1910年代初めのことであるとした。それは、神戸正雄（京都帝国大学）、山崎覚次郎（東京帝国大学）、高城仙次郎（慶應義塾）が、金本位制を巡って論争した時のことである。山崎は1904（明治37）－1907（明治40）年に早稲田でも「銀行論」を担当した（藤原・立脇 2004: 227）。

(7) もっとも、直接の廃刊理由は、第1回衆議院選挙に出馬して、政治家を目指すためであった。天野は第1回には当選するが、第2回には落選した。

天野先生の経済学の講義の進むにつれて、私利心と自由競争の理論が、段々解き明かされたので、これ又、…私には、この広大な理論に接して驚嘆し、それに強く刺激せられ、それからといふものは、…専ら天野先生に私淑する様になつた。こうなつたのは、矢張り、先生の徹底せる人格の力が、自ら講義の中に現はれて、それに引付けられたのである。私としては、意外な遭遇であつたと同時に、予期せない果報を拾つた訳である。(p. 5)

天野先生が始て早稲田の教壇に立たれたのは23歳、また洛陽の紙価を高からしめ、実に書肆(し)富山房の基礎を築いた程に売れた名著『経済原論』の公刊は27歳の時であり、31歳には第1回衆議院議員に選出せられ、33歳の時『高等経済原論』としてミルの訳書を上梓した。しかも其の間幾多の著述がある。(p. 7)

先生の経済学は古いとか新しくないとか、よく耳にした所であるが、ソナなことで先生を軽重するは当らない。新説の紹介位は、先生にして為さんと欲すれば容易の業であるに相違ない。だが、先生の目的は、最も難事とする経済上の理論の実際化にあつた。之に成功して、その社会に与へた影響の偉大であつたことは一般の知る所だ。だがわたしはこゝに、より遙かに貴重なものを先生は持たれてゐたと思ふ。それは先生の高邁な人格の力と徹底的な実践とに依て人に、人としての眼を開かせ、人としての心に火を点ずる、真の人の師たる資格を具へてゐたことだ。今日所謂学問の先生はザラにある。併し先生の如き人の師は殆ど見当たらない。(pp. 11-12)

天野の講義から受ける印象は、『経済原論』だけを読んだ時の印象とはかなり異なるのかもしれない。ここで挙がっている翻訳書のミル『高等経済原論』は米ラフリン版(Mill 1884)であることに注意を喚起しておこう。三浦の「思い出」は朗々と続き、天野が議論好きであつたこと、『学理と実際の調和』を

めざす教育者であったことも伝わってくる。

英語圏での経済学の歴史的展開に照らせば、ミルの経済学も、天野の経済学も決して古くはなかった。ミルの『原理』(1848; 1871)については、普及版が幾つか出版されるほどの強い生命力をもっていた。天野が翻訳対象にした米ラフリン版(Mill 1884)は大学学部レベルの入門書で、自由放任を強調する特徴をもっていた。一方で、英アシュレイ版(Mill 1902)は上級生や研究者に読まれたようだ。イギリスで新古典派経済学者とみなされる A. マーシャルや W. S. ジェヴォンズが活躍するようになってからも、J. S. ミル『経済学原理』(1871)は読まれ続けていた。そして、J. M. ケインズ自身の経済学の展開を見ると、『貨幣改革論』(1923)では貿易や経常収支、為替相場の問題、各国での金利格差の問題を議論していた。彼は『貨幣論』(1930)では、ヴィクセルを参照したけれど、消費財物価水準と産出物価水準の決定方程式を軸にして、価格変化に導かれる産出量変化を考察していた。そして、『雇用、利子及び貨幣の一般理論』(1936)を執筆した時には、ケインズはミルに近い枠組みを採用しながら、消費が減少したり貯蓄を増加させようとしたりすると、貯蓄-投資を均衡化させるように所得水準が調整されて、失業均衡が発生しうるという、ミルとは異なる結論(ケインズ経済学)を主張したのであった。それゆえイギリスでは、ケインズが反旗を翻した相手(「古典派経済学者」)は J. S. ミルだったとされている⁽⁸⁾。

2.3 石橋湛山、天野を読む

石橋湛山の「天野為之伝」(1950)は、天野経済学についての標準的理解を提供したといってよい。これは浅川榮次郎と西田長壽の『天野為之』(1950)を紹介し書評する記事として、同年7月の『東洋経済新報』に4回連続して掲

(8) 1990年9月に英ケンブリッジ大学で開催された「マーシャル『経済学原理』出版100周年記念会議」に参加した折、筆者はイギリスの経済思想史・経済学史について、詳しく知ることができた。

載されたものである。石橋は早稲田大学文学部出身で、学生時代に、天野の経済学の講義を受けることはなかったが、1911年に東洋経済新報社という社名に「経済」の入る会社に就職したことから、薦められて、天野の『経済学綱要』（1902）を読んで経済学の勉強を始めた。翌1912年10月に、編集を担当していた『東洋時論』が廃刊になったため、石橋は『東洋経済新報』の記者となり、E. R. A. セリグマン（米コロンビア大学）の『経済原論』（1905）、J. S. ミルの『経済学原理』等の英文原書を皮切りに、経済学、経済史、自由主義等をテーマとする書物を英語や日本語で読み進めていった。石橋は1920年頃から J. M. ケインズにも注目し始め、後述のように、1931年の「消費経済と生産経済」と題するラジオ講話で、後に「貯蓄のパラドックス」や「合成の誤謬」と呼ばれるようになる視点を提示したのであった⁽⁹⁾。

石橋は、天野の社会貢献を3つに分け、最初の仕事は経済学者として、第2は経済評論家（経済ジャーナリスト）として、第3は教育者としてのものとした。本稿は経済学者としての貢献についてよく言及される発言を引用しておく。

天野博士の経済学は大体に於て J・S・ミルの祖述だと称される。之れは伝記の著者も認めている通り、当時の日本乃至世界の要求がそこにあったからで、博士は正に其の要求に応じ、日本に自由主義経済理論を移植する先頭をなしたわけである。併し博士は、単に外国の学問思想を日本に翻訳輸入する態度は取らず、之れを自分の物。日本の物として咀嚼消化し、博士独自の経済学を打ち立てた。後年福田徳三博士は明治前期の三大経済学者として、福沢諭吉、田口卯吉、天野為之の三人を挙げているそうである

(9) 『湛山回想』（1951）によれば、社会人（哲学書生）にとっては、「あまりにも簡単にすぎてかえって理解が出来ず、興味をもち得なかった」としている（石橋 1951: 93）。早稲田大学院生の田中久貴氏の御教示に感謝する。ただし、ケインズ以前のマクロ経済学の枠組みは提供されているので、ケインズの議論を理解する際には役立ったに違いない。

が（序文2頁），若しその中で自己の経済学体系をもつ学者を云うなれば，天野為之一人に止めをささなければならないであろう。天野博士には，この点に於て日本の経済学者として何人の追隨も許さぬ特色があったと称し得る。（石橋 1950: 561）

次節で見るように，天野が行ったのはミルの祖述というよりも，ミルの改良であり，「マクロ経済学」への道を踏み出していたのであった。

天野の経済評論家としての活動は、『中央学術雑誌』『内外政党事情』『朝野新聞』『読売新聞』に関係したことで、『東京理財雑誌』を1889年に創刊したことである。年末には廃刊になったが，創刊の辞はよく引用されてきた。石橋（1950）も浅川・西田（1950: 117 引用）から引用した。

本誌発刊の目的たるや経済上政治上世態上の出来事を評論し又右に関する学問の理論及び適用を叙述するにあり即ち一方には学問の光明に照らして事実を明らかにし他の一方には事実の根底に設けて学理を確かめ以て学問の理論と応用とをして又々相併行せしめ以て実際と学問とをして両々相提携せしめ之に由て多少の裨益を本邦の学問上及び政治上に与へんと期するなり。

天野の経済研究，経済学研究の姿勢が明快に主張されているものといえよう。

2.4 早稲田人，天野を語る

早稲田大学の人々が天野を語り始めたのは，戦後の事である。その理由は，1917年にいわゆる「早稲田騒動」が起こり，天野が高田早苗・市島謙吉等大学幹部と対立して早稲田大学と絶縁することになったからであった。

戦後まず，平田富太郎の「天野為之——古典学派経済学の先駆者——」

(1957) が、早稲田大学創立75周年を記念して出版された『近代日本の社会科学と早稲田大学』に収録された。幕末と明治時代における日本での西洋経済学の翻訳・紹介の様子が詳しく述べられており、貴重な資料となっている。1961年11月17日(金)に催された「天野爲之生誕百年記念式典」も同様である。大濱信泉早稲田大学総長が式辞を述べた後、阿部賢一理事、石橋湛山名誉博士・元首相、小泉信三元慶応義塾長が講演を行った。既述のようにこの時に、天野爲之著『経済原論』(初版)が複製された。そして、『早稲田学報』(10月号)で「天野爲之先生生誕百年記念特集」が組まれ、翌1962年の『早稲田大学図書館紀要』から3号にわたって、「天野爲之雑誌論文総目録」が掲載された。

次に、岡田純一の「経済学者としての天野爲之——日本における経済科学の創始——」(1975)がある。岡田の専門はフランス経済思想史であるが、商学部創設75周年の折に、石橋湛山(1950)、平田(1957)、浅川榮次郎・西田長壽の『天野爲之』(1950)を検証する形で書き進められ、天野を「日本における経済学の創始者」と最初に位置付けた論文になった。岡田(1975)は『早稲田商学』に掲載され、その主張は『早稲田大学商学部九十年史』(1996)で再確認され、『早稲田大学商学部百年史』においては、宮島・花井(2004)だけではなく、嶋村他(2004)でも踏襲されたので、詳論は省く。ただ一点、岡田(1975)が、長幸男・住谷一彦編『近代日本経済思想史』全2巻(1969)などに代表される、当時の日本経済思想史研究の方法や流れを反映して、「日本への経済学の導入史」を見る、という形で研究を進めていたことは強調しておきたい。岡田の専門はフランス経済学史であり、天野の経済学にはフランス経済学の影響はほとんど見られない。それゆえ、岡田には天野が見落としたものが多々あると感じられたようである⁽¹⁰⁾。

(10) ジェヴォンズの限界効用遞減論については、前橋(1885)による翻訳が『中央学術雑誌』に収録されているので、天野は承知していたはずであることも付記しておこう。大淵(2008)は、岡田(1975)に主に頼ったのであるが、宮島・花井(2004)とはかなり異なる天野評価を下すに至ったといえる。また杉山(1998)は天野の政策論とビジネス教育論をカバーしていて興味深い。

本稿では、フランスの経済思想史自体が、イギリスの経済思想史とは異なる、つまりフランスとイギリスで歴史認識に相違がある、ということ是指摘しておきたい。2010年、あるフランス人経済学史家によれば、フランスで経済思想史を教える際には、経済表で有名なケネーや、「農業こそが価値を生み出す」と主張する重農主義から始めることが多いようで、功利主義思想あたりでイギリス経済思想史と重なり合う。フランスでは19世紀にクルノ、デュピュイ、ワルラスと、グラフや数式を使う経済分析が展開した点が出色である。20世紀については、外国の経済学者達も視野に入り、J. M. ケインズや M. フリードマンが紹介されるとのことであった。

早稲田大学の中での天野の位置づけについては、同大学史編集所『早稲田大学百年史』第1巻(1978)などがあり、商学部創設者としても天野については、『早稲田大学商学部百年史』(2004)、『早稲田大学商学部九十年史』(1996)などが参照される。学問研究と職業教育の両立をめざす「学理と実際の調和」、「道德の重要性」は、商学部では当然の如く継承されていて、「商学部の伝承(oral tradition)」となっていることは強調しておきたい。

2.5 歴史家、天野を捉える

天野が亡くなる少し前、明治期の経済思想史の研究を始めた堀経夫(1933)によって、経済学者としての天野と彼の『経済原論』がカバーされるようになっていく。そして、堀の『明治経済思想史』は版を重ねていく。井上琢智の『黎明期日本の経済思想』(2006)でも、天野は注目される経済学者の一人として記されていくものの、詳論はない。その理由は、天野の著書・講述者が早稲田以外では、入手困難であったことが災いしたとことは明らかである。

最も精力的に天野研究を進めた経済思想史家は、杉原四郎であった。杉原は日本研究だけではなく、J. S. ミルを中心にイギリス経済思想を研究した人としてもよく知られていたので、天野に関心を持ったのも不思議ではない。杉原は、

経済学の知識の普及には経済雑誌が大きな役割を果たしてきたことに注目してきており、彼の『日本の経済雑誌』（1987）や、岡田和喜との共編『田口卯吉と「東京経済雑誌」』（1995）でも、『東洋経済新報』に多くの記事を寄せた天野に言及していた⁽¹¹⁾。天野に焦点を絞った論考としては、『日本の経済思想家たち』（1990）のなかの、「天野為之の経済思想——『勤儉貯蓄新論』を中心に」がある。杉原は石橋（1950）から始めて、経済ジャーナリストとしての天野、早稲田実業中学の校長となった教育者としての天野に注目した。天野は英語で専門的知識を得た人として捉えられており、天野に近かった小野梓が功利主義思想を中心にイギリス思想の知識が豊かだったことが注目される一方で、天野が訳したミル『経済原理』がアメリカのラフリン版であったことも承知していた。その上で、天野独自の議論としての「勤儉貯蓄新論」に関心もあったようである。天野に関連するものとして、杉原の「フェノロサの東京大学講義—阪谷芳郎の筆記ノートを中心として—」（1973）も注目される。

藤井隆至編集の『日本史小百科 近代経済思想』（1998）には、中村宗悦が「フェノロサ」「天野為之」、老川慶喜が「『東京経済雑誌』」の項目を寄稿している。日本経済思想史研究者は天野や経済雑誌の威力を忘れてはいなかったが、国会図書館の明治期デジタルライブラリーに天野の著述がアップロードされるまで、その全貌は捉えにくく、天野の貢献が無視されることになったのであった。書籍の電子化は新しい作品を生み出すだけではない。アクセスが困難だった古い書籍を蘇らせることもできる。天野の著書に今アクセスすることによって、経済学の歴史に対する理解が変わりうることは間違いないと思われる。

3. 天野為之の経済学を振り返る

天野は諸制度の変化の著しい幕末から明治時代初期に勉学を進めたので、そ

(11) 杉原の議論の英文版は Sugihara (1998) である。Omori (1998) は、東京専門学校や天野が経済学の知識を普及させる役割を果たしたことを英文で論じたものである。

の環境変化を明らかにして天野のポジションを把握していかななくてはならない。その上で、「銀行原理」(1886),『経済原論』(1886),『経済学研究法』(1890),『銀行論』(1890),『勤儉貯蓄新論』(1901)を踏まえた上で、天野の『経済学綱要』(1902)に光をあて、そこから「マクロ経済学」を抽出して、高橋是清と石橋湛山の「ケインズに先行するケインズ理論」を再確認しておきたい。

3.1 英語を学ぶ

天野為之は1859(万延元年)年12月27日に、唐津小笠原家の江戸藩邸詰の藩医(漢方医)天野松庵と妻鏡子の長男として生まれた。1867(慶應3)年10月14日に徳川慶喜が大政を奉還し、12月に王政復古の大号令が発せられた。翌年には鳥羽伏見の戦に続き、慶喜征伐の令が発せられて、歴史が容赦なく転換した。当主の小笠原長行(明山)は老中職を免ぜられ、官位を剥奪されて失踪、江戸邸は没収された。江戸時代から明治時代への動乱のさなか、天野一家は一時的に千葉に身を寄せた。父松庵が1868(慶應4)年6月8日に病没したあと、母鏡子は、為之と弟喜之助を連れて、藩地に帰ることを決意し、横浜から海路をとり唐津に向かった(浅川・西田 1950)。

鎖国時代、長崎の出島は江戸幕府直轄でオランダとの間で合法的な対外関係が築かれた唯一の地で「西欧文化の門戸」であり、佐賀藩は福岡藩と共に長崎警護を任務としていたので、西洋文明に接する機会に恵まれていた。それに対して唐津藩は時代の変化に立ち遅れ、維新に際して受けた打撃が大きかっただけに、藩主小笠原長国は危機感を持って藩政改革に取り組んだ。そして国運の発展を期すための企画として浮上したのが、英語学校の設立であった。担当教師には、東京・新橋あたりにいた高橋是清に白羽の矢が立てられ、高橋としても心機一転、唐津行きを決意したのであった。

高橋是清は唐津において、1871-2年頃の2年弱にわたって若き俊英達(13-14歳)に英語を教授した。彼は授業熱心で、唐津の耐恒(たいこう)寮でも、

かつて東京の「大学南校でやったのと同じく、教室では一切英語で教えて、日本語は成るべく使わないようにした」（高橋 1929上：133; 高橋 1936上：169）。そして、唐津港に外国船が石炭を積みに来た時、船長に申し入れて、天野を含む生徒14-15名に外国人との会話を体験させたこともあった（高橋 1929上：134; 高橋 1936上：110）。「当時の始めからの生徒で、今世の中に知られて生存しているのは、天野為之博士」（高橋 1929上：134-5; 高橋 1936上：110）として、高橋は当時の生徒達の最初に天野を挙げ、かつ東京で学ぶことを勧めているので、天野に余ほど強い印象を持ったとみえる⁽¹²⁾。

1871（明治4）年7月には廃藩置県があり、藩知事小笠原長国は東京に転出、高橋是清も東京に戻った。天野為之は1873（明治6）年に東京に出て、1875（明治8）年に開成学校に、1877（明治10）年に東京大学予備門に入った。天野は「試業未済」との理由で予備門の第4学年を2回やっている。西田・浅川（1950: 17）が丹念に調べたにもかかわらず詳しい経緯は不明のままである。ここで、1年遅れで入学してきた高田早苗、坪内雄蔵（逍遙）達に学年で追いつかれ、揃って1878（明治11）年に東京大学の学部に進んだ。天野は1882（明治15）年7月に、東京大学文学部政治理財科を卒業して文学士となり、そして東京専門学校（後の早稲田大学）の創立に与り維持員兼講師となつて、『経済原論』になる内容の講義を始めたのであった。

(12) リチャード・スメサーストの高橋是清伝『日本のケインズ——その生涯と思想』（2007）は天野に言及しているが、高橋（やスメサースト）にとって大隈重信（佐賀藩出身）の印象の方が強かったようである。島善高『大隈重信』（2011）を読むと、天野の活動が視野に入っていることがわかる。大園隆二郎『大隈重信』（2005）は大隈の青少年期に焦点をおく評伝である。佐賀藩と唐津藩（いずれも現在では佐賀県）の人々がそれぞれ眺めていた海の違いを考慮すると面白い。佐賀からは長崎と有明海を越えると東シナ海が広がり中国大陆が意識されるのに対して、唐津からは玄界灘を越えると朝鮮半島やロシア大陸が意識されるようだ。佐賀・唐津などに跨って天山（標高1046m）があり、両地に住む人々にとって海とその向こうについての意識に相違を発生させたようだ。

3.2 東京大学で学ぶ

1877（明治10）年、4月12日付文部省布達第2号により、「東京大学」の創立が決まった。学制改革である。旧東京開成学校に法理文の3学部が、旧東京医学校に医学部が置かれた。同時に、東京英語学校が東京大学予備門として法理文3学部の所管下に置かれることになった。

同1877年9月、法理文3学部は新たな教科編成を決定し、文部省の認可を得た。教科編成の基本方針は、「理論實用共に偏取偏廃せず、専ら其中庸を取るを主旨とし、以て一学科中に博く諸科目を加へて之を兼修せしむる事」（カタカナはひらがなに改めた。以下同様）とされた（東京大学百年史編集委員会1986: 18）。その方針に従い、文学部第一科（史学哲学及政治学科）の教科課程は次の通りになった⁽¹³⁾。

第1年級 英語（論文）、論理学、心理学（大意）、和文学、漢文学、仏あるいは独語

第2年級 和文学、漢文学、英文学、哲学（哲学史、心理学）、欧米史学、仏または独語

第3年級 和文学、漢文学、英文学、哲学（道義学）、欧米史学、政治学、経済学

第4年級 英文学、欧米史学、哲学、政学及列国交際法

もっとも後述のように、経済学と政治学はアメリカ人フェノロサが担当し始めた時、第3年級と第4年級の2年にわたって教えることに変更された。経済学は当時「理財学」と呼ばれ、英語名称はPolitical Economyであった。同1877年12月19日に東京大学第一回卒業証書授与式が行われ、卒業生は7月卒業

(13) 文学部は第1科（史学哲学及政治学科）と第2科（和漢文学科）に分けられた。

の理学部3名のみであった。翌1878年7月8日に第二回卒業証書授与式が行われ、法学部卒業生6名がいた。

1878（明治11）年に、フェノロサが来日し、文学部の政治学教授を職任された。この月末現在の東京大学在籍学生数は、理学部102名、法学部36名（4年生7名、3年生11名、2年生10名、1年生8名）、文学部19名（2年生12名、1年生7名）であった⁽¹⁴⁾。なお、90%の学生が給費生であった。ただし杉原（1987）によれば、フェノロサの担当授業「経済学」の出席者は100名前後いたことになっているので、正規学生以外の出席者が相当数いたことになる。

1878（明治11）年12月に文部省より、東京大学に学位授与の権を与える通達があり、それを受けて、1879（明治12）年7月10日には、卒業式改め「学位証書授与式」（第1回）が挙行された。1877（明治10）年7月以降1878（明治11）年12月に至る3学部卒業生（24名）並びに12年7月の卒業生（31名）計55名に対して学位が授与された。この月初め現在（卒業生を含む）3学部学生数は177名、うち文学部は27名（3年生8名、2年生7名、1年生10名、未試2名）。1879年（明治12）年度が文学部の完成年度とされ、1880（明治13）年7月10日の学位授与式において、文学部で初の卒業生8名が巣立った⁽¹⁵⁾。

1881（明治14）年9月、文学部は二学科体制から、哲学科（第一科）、政治学及理財学科（第二科）、和漢文学科（第三科）の三学科体制に組織替えされた。

東京大学百年史編集委員会（1986）によれば、1882（明治15）年4月の出来事に次の記述がある。

16日、大隈重信の立憲改進黨の結成式が行われる。かねて小野梓の指導

(14) 東京大学本科生は1881年8月から、「学生」と呼ばれるようになる。それ以前は、諸学校で学ぶ者全てが「生徒」と記されていたが、本稿では煩雑になるのを避けるため、「学生」の表記で統一する。東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 部局史1』（1986: 29）などを参考にされたい。

(15) そのうち一人和田垣謙三は、1880（明治13）年10月に、理財学専攻のために政府によりイギリスに派遣された。

下に鷗渡会を結成していた高田早苗、市島謙吉、山田一郎、天野為之（以上文学部学生）、…らがこれに参加、また新聞紙上にいわゆる「主権論争」をも展開する。（p. 31）

天野を含めて、早稲田大学設立につながる人々の行動が注目を浴びていたことがわかる。鷗渡会については、同大学史編集所編『早稲田大学百年史』第1巻（1978）第2編第5章「鷗渡会」などが参照される。

3.3 フェノロサから学ぶ

アーネスト・フェノロサは1878年8月に来日し、東京大学において8年間、政治学、哲学史、経済学（理財学）を講じた⁽¹⁶⁾。彼は1853年にアメリカのマサチューセッツ州に生まれ、父はスペインから移民した音楽教師で、母は同州セイラムの名家の出身であった。彼は1870～74年にハーバード大学（Harvard College）で学び、続いて同大学院に進学した。1876年にスペンサーの総合哲学についての研究によって修了し、ボストン美術館付属の絵画学校で油絵を習っていたものの、同地での就職先の目途が立っていなかった（山口 2000: 8; 東京大学百年史編集委員会 1986: 21）。

エドワード・シルベスター・モース（1838－1925）は、1877年6月に海洋生物研究のために日本を訪れたのだが、懇願されて東京大学の物理学教授に就任することになった。さらにモースは、教材の調達と物理学・政治学（Political Philosophy）担当の教授探しのために、1877年11月から6カ月間アメリカに帰国した。政治学教授については、ハーバード大学学長のチャールズ・W・エリオット（化学）を通じて、チャールズ・エリオット・ノートン（美術史）からフェノロサを紹介されることになった（山口 2000: 8; 東京大学百年史編集委員

(16) フェノロサは途中から、社会学（世態学）も担当し始めた。

会 1986: 21)。エリオットとノートン両名の推薦状を得て、フェノロサは1878年4月に東京大学から内定通知と契約書を受け取り、追加で経済学 (Political Economy) の授業も担当することになった。そして1878年8月に東京に到着し、翌日から授業を担当し始めたのであった。

1878年前後、ハーバード大学の経済学 (Political Economy) 担当のポストは2つで、1つはチャールズ・フランクリン・ダンバー (Charles Franklin Dunbar, 1830-1900) が占め、もう一つについては1878年にジェイムス・ローレンス・ラフリン (James Laurence Laughlin, 1850-1933) がサイラス・マルカス・マクヴェイン (Silas Marcus Macvane, 1824-1914) の後継者となった (Mason and Lamont 1982)。ダンバーはニューイングランドの日報紙 *Boston Daily Advertiser* の編集者で貨幣・金融問題の論客として活躍していたところ、1871年にエリオット学長の判断で「外部採用」されたのであった。それでも Church (1965: 386) によれば、ダンバーは当時のアカデミック経済学者の誰よりも大学の「経済学」担当者にふさわしく、教授の資格も申し分なかった。そしてダンバーが授業で経済学の授業図書として指定したのが、まずアダム・スミス、J. S. ミル、それからフォーセット、ケアンズ、マカロック、バジヨットの著作であった。指定図書や他の担当者交代の状況に鑑みると、フェノロサは日本での経済学の授業について、ダンバーから助言を得た可能性が高い⁽¹⁷⁾。

フェノロサの講義の日本語概要や報告 (申報)、英語での試験問題が現存する限り、山口静一編『フェノロサ社会論集』(2000) に収録されている⁽¹⁸⁾。そして、浅川榮次郎・西田長壽の『天野為之』(1950) を照らし合わせれば、天野の受講した講義の概要が浮かび上がってくる。フェノロサは非常に熱心に英語で講義し、予定時間を超過して続けることも多かったので、学生たちも引き込まれるようにして熱心にならざるをえなかった。

天野為之は1878 (明治11) 年に東京大学文学部の第1学年となり、翌1879 (明治12) 年度には第2学年に進んで、フェノロサから「哲学史」を学んだ。明治

12年度の講義報告を、11年度のそれを参照しながら見ると、シュヴェグラー達の著書を参考書として、デカルトから、ヘーゲル、スペンサーに至る近現代哲学の大意を教授した、となる。

天野は1880（明治13）年には第3学年に進み、フェノロサから経済学と政治学の講義を受けた⁽¹⁹⁾。既述のように、経済学も政治学も第3年次と第4年次の2年間にわたって受講することになっていた。明治13年の経済学の初年度授業の教科書について、講義概要と報告を合わせ見ると、ミルの『経済学原理』を教科書とし、「経済学の原則を考究せしめ」、つまり、経済諸概念を定義しながら、一国のマクロ経済を概説し、貿易や貨幣について教えたと思われる。そして、ケアンズの『経済要義』（1875）を推薦図書とし、授業内容にも取り入れたようだ。概要では、その上で、相対立する経済学者の諸見解を論じることになっており、その参考図書には、ミル、ケアリー、ケアンズ、ジェヴォンズ、ボーウエンの著書が挙げられている。経済学の2年目の授業は、卒業を控えた学生たちが専修すべき論題として、労働、税法、外国貿易、銀行法、貨幣論を取

(17) ジョゼフ・ドーフマン (Dorfman 1946: 65) は、ダンバーを「慎重な自由貿易論者で、健全財政主義者」と特徴づけた (Mason and Lamont 1982: 386)。アメリカで南北戦争前によく読まれたフランシス・ウェイランド (Francis Wayland, 1796-1865) は、日本では福沢諭吉によって教材として用いられた。2012年3月25日、27日に経済学史のメーリングリストを通じて助言をくださった Roger Sandilands, David Mitch, Peter G. Stillman の各氏に感謝する。ここで、アダム・スミスはフェノロサの東京大学での講義の教科書にも参考文献にも挙がっていないことに注意を促しておこう。その理由は、ミルの英語が非常に読み易いものに対して、アダム・スミスの『国富論』の英語がかなり難しく、非英語母語話者の学生達に読書指定するには不向きとみなされたと推測してよいであろう。ちなみに2008年にアメリカのデューク大学で「18世紀の経済思想史」の学部セミナーをのぞいたとき、授業はマンデヴィル『蜂の寓話』（1714）から始まり、ロックやヒュームをたどって、アダム・スミスの『道徳情操論』（1759）と『国富論』（1776）で終わっていた。この授業に出ると、『国富論』の英語が突出して難しいことがよくわかる。マンデヴィルの蜜蜂はイギリス王立経済学会 (RES) のシンボルになっているので、英語圏ではマンデヴィルから始まる経済思想史が教えられるのはそれほど珍しいことではなかったと思われる (RES のウェブサイトや機関誌 *Economic Journal* を参照されたい)。経済思想史・経済学史について世界では複数の歴史が存在しうる、つまりパラレル・ヒストリーが存在する可能性を認識する必要がある。

(18) フェノロサの試験問題は Yamaguchi ed. (2009) には英文のまま収録されている。

(19) フェノロサの講義については高田早苗による厳しい批評もあるので、「政治学」についての詳細は、山口 (2000) に譲ることとする。

り上げることになっている。そして卒業論文の作成が課題となっており、年次報告によれば、学生達が各自で選んだ題目は、通貨、銀行、商業、外国為替等であった。まるでハーバードのチャールズ・ダンバーと関心を共有しているように見える。

3.4 J. S. ミル『経済学原理』を読む

イギリスのジョン・スチュアート・ミルの『経済学原理、および社会哲学に対するそれらの原理の若干の応用』は生命力の長い体系的書物であった。初版がイギリスで1848年に出版され、その後、第2版1849年、第3版1852年、第4版1857年、第5版1862年、第6版1865年、第7版1871年と、七つの版を重ねた。1865年には民衆版も出版され、同年の第6版と内容は同じで、外国語文献からの引用をすべて英語に翻訳したとされる。1871年の第7版は、第6版の民衆版から字句を訂正したものとなっている（Mill 1902; 末永 1959: 3）。アメリカでも出版されたほか、フランス語版、ドイツ語版が利用可能である。さらに英語では、文庫本のほか、他の経済学者が編集した普及版が出版されている。1870年のアメリカ・ニューヨーク版は単にイギリスの第5版であったが、1884年に米ハーバード大学のローレンス・ラフリン編集の版（Mill 1884）が、1902年にはイギリスのウィリアム・アシュレイ編集の版（Mill 1902）が利用可能になっている。

フェノロサが1878年から東京大学で経済学の教科書として指定したのは、ミルの『経済学原理』の第5版、第6版、第7版あたりと推測される。ロバート・チャーチ（Church 1965）によれば、1870年代のアメリカ、特にハーバード大学では、経済学の教え方をめぐって対立があった。当時、ドイツの大学院教育が最も制度化されていて外国人にとっても博士号が取得しやすかったので、多くのアメリカ人がドイツに渡り、博士号をとって帰国して大学で教鞭をとっていた。しかし、ドイツ歴史学派的なラインから、抽象的な議論を含むイギリス

古典派経済学のラインに移行する流れが見られ、さらに、イギリス古典派経済学ではもはや現実経済を説明しきれない、銀行に関する議論が不十分である、と考えられるようになっていた。19世紀には、アメリカにも日本にも民間の発券銀行が存在しており、銀行制度は脆弱であった²⁰⁾。そしてアメリカではミルの『経済学原理』はよく読まれていたが、社会哲学を切り離す傾向があった。この流れに乗ったのが、上のラフリン版（Mill 1884）であり、アメリカの大学生向けにと、アメリカの経済史や制度、事例、さらにデータやグラフが追加された上での縮約版となり、サブタイトルから「社会哲学に対する応用」が削除されたのであった。

天野の経済理論の基礎には、J. S. ミルの『経済学原理』がある。既述のように、天野が編集に係わった『中央学術雑誌』には、ジェヴォンズの限界効用逓減の法則を翻訳した論文（前橋 1885）があるので、天野はこうしたミルを越える動向は承知していた。岡田（1975）が指摘した様に、天野の『経済原論』初版（1886）が世に出た頃からますます新しい学説や経済モデルが出され、経済理論は多様化する形で進歩したということになるであろう。価格-数量平面に需要曲線や供給曲線を描いたり、多くの経済主体の行動が奏でる相互依存関係を同時方程式体系で表現したりする経済学者達も現れた。天野は、効用概念は柔軟に『経済学綱要』（1902）に取り入れたものの、ミルの『経済学原理』の理論的な枠組みを採用し、銀行の社会的役割などを考察する際にそれをいわば参照基準として使い続けたのであった。天野の研究姿勢は、イギリスの J. M. ケインズの『一般理論』（1936）と重なることになるので、ミルを土台として採用し続けたからといって、決して批判されるにあたらない。

20) 日本の「国立銀行」（認可制下の民間銀行）は1873（明治6）年に国立銀行紙幣（金兌換紙幣）を発行し始めた。が、国立銀行紙幣は1876（明治9）年に兌換停止、1899（明治32）年に全て通用停止となった（日本銀行金融研究所 1993）。日本銀行の開業は1882（明治15）年なので、日本では9年ほど「フリーバンキング」に近かったといえる。

3.5 『経済原論』（1886）から『経済学研究法』（1890）へ

天野為之は1886年に著書『経済原論』（経済理論）と『商政標準』（経済政策論）を出版した。彼はそれぞれに英訳タイトルを自らつけており、『経済原論』は“The Theory of Political Economy”，『商政標準』は“The Principles of Commercial Legislation”であった。『経済原論』の原稿は、1882年にはほぼ出来上がっていて、早稲田大学（東京専門学校）の講義ノートとして用いられ始めた。同書の定価1円30銭で、決して安価とはいえないにもかかわらず、1888年3月から1897年にかけて22版程を重ね、3万部が売れた（浅川・西田 1950: 97, 99）。当時は、書籍が専門知識を普及させる主要媒体であったということは念頭に置かななくてはならないが、それにしてもその売行きは誠に驚異的である。天野の通信教育用教科書・講述書の売行きもよかったとされる。

天野の『経済原論』は三部構成をとり、生産、分配、交易を論じたあと、付録として、「収穫逓減の法則」や「ニューヨーク手形交換所の景況」がおかれた。天野の経済理論の基礎には、J. S. ミルの『経済学原理』から抽出された経済理論があることは疑いないが、当時それだけではアメリカ経済の現実だけではなく、日本経済の現実をも説明できなくなっていた。

正直なところ2011-12年に、天野の『経済原論』を何度か眺めるように読むと、ミルの原典や米ラフリン版より理論的に見える。ただ、経済学の良い教科書には、学生の想像力をかきたて理解を高進させるような例示的説明が必要なのはであるが、天野の『経済原論』ではヨーロッパの事例がほとんど削除され、アメリカの事例が残されて、日本の事例は追加されなかったため、米ラフリン版よりアメリカ的にさえ見える。そして、天野は本書では、イギリス古典派経済学者達による資産家の「生産的消費」（労働雇用による生産活動）と「不生産的消費」（贅沢支出等）の区別を批判的に検討した。

仮令は人あり客集め酒を飲む其価一年に平均一万円なりと仮定せよ さ

らに問題を転して此人が一万円を費して酒を沽（か）うを止め以て労力者を雇ひ入れ他の物品を産出せりと想像せよ 語を換へて之を言ふに前には不生産的に消費せし金員を生産的に消費するゝとはなれりと仮定せよ 此場合に当て一国の生産上に如何なる差等を産出するや（p. 37）

天野はこのような質問を投げかけ、結局、一国全体の産出高については決定論的なことは言わなかったものの、「殖産上の相違がある」、すなわち、一国全体の生産物の構成、労働者の仕事内容が異なる、と議論を続けていった。天野は『経済学綱要』（1902）で、より分かりやすい、マクロ経済学の議論を展開することになるので、それを後で見よう。

19世紀の後半、経済学は多様化し、大きく変容していく。天野の『経済学研究法』（1890）を読むと、その変化と多様性がわかりやすく伝わってくるので、石橋湛山が天野の三部作として同書を入れたのはこのあたりに理由がありそうである。おそらく学生向けの経済学副読本のような書物として位置づけられたのであろう。専門家たちですら、「経済学とは何か」という定義自体を議論し、経済学と称して議論されている内容を確認し合っていたのである。同書では経済学の理論と応用も大きなトピックであり、このことは、J. S. ミルの考えていた「社会哲学への応用」から脱皮したことを意味する。そして改めて「経済学と諸学の関係」が議論され、経済学（政治経済学あるいは国民経済学）を勉強するためには、民間経済学、道徳学、歴史学、統計学、法律学、政治学も学ぶべきである、とされた。道徳学に関する叙述は日本研究者によっても注目されるようなので、次の文を引用しておこう。

元来経済学は全く道徳学より異なる学科なりと雖ども而も尚ほ之と密接の関係を有し殊に其応用部分に於て然りと為す 経済学の地位は其応用の部分に於て歩を道徳学に譲るものなり 故に道徳学の最高の教旨は決して

単純なる経済上の利益の為に軽々看過せらるべきものにあらず (pp. 36-37)

天野は、道徳的感情を持つことの大切さを、児童労働を例にあげて説明していく。一般的な議論もさることながら、どういう場面で道徳的判断が経済的判断に優先されるのかは、その都度、自分の道徳的感情に訴えて判断すべきことを示唆している。『経済学研究法』では、方法論も盛んに議論されており、演繹法や帰納法のほか、綜合法、合理法、先験法、後験法、経験法、分解法が挙げられている。数学利用にも触れられ、リカードの数値例やクルノの数学的分析も言及されていて、経済学が隆盛している様子が伝わってくる⁽²¹⁾。

3.6 天野経済学の真髄『経済学綱要』(1902)

天野の『経済原論』(1886)は経済理論のみで、経済政策論は『商政標準』(1886)に委ねられていた。天野が銀行原理を講義したり、「銀行原理」(1886)、『銀行論』(1890)を公刊したりしているところをみると、銀行論に対する世間のニーズも高かったのであろう。さらに、杉原(1990)が注目したように、天野は資本の増加を支える貯蓄について雑誌で論じ、その論考をまとめて『勤儉貯蓄新論』(1901)として出版した。徳川時代には、「江戸っ子は宵越しの金を持たない」という言い回しに表れるように、財産を増やしたり貯蓄をしたりすることを恥とする空気が強かった。米遣い経済に特有とされる、貴穀賤金の思想もあった。それゆえ、江戸時代末期に農村指導者として活躍した二宮尊徳も、次のような戒めを発しなければならなかった(池尾 1988: 76)。

(21) もっとも岡田(1975)では、天野の『経済学研究法』(1890a)が丁寧に批判的に検討された。天野(1890a)は、Cossa(1880)の前半部6章の翻訳に近いものであるが、Cairnes(1875)も熟読した跡が見られるとした(岡田 1975: 57)。

夫譲は人道なり。今日のものを明日に譲り、今年の者を来年に譲るの道を勤めざるは、人にして人にあらず。……宵越しの銭を持たぬと云は、鳥獣の道にして、人道にあらず。鳥獣には今日の物を明日に譲り、今年の物を来年に譲るの道なし。人は然らず。今日の物を明日に譲り、今年の物を来年に譲り、其上子孫に譲り、他に譲るの道あり。(福住 1893: 第79話)

そして明治維新後には、政府主導によって貯蓄運動が苦勞しながらも地道に粘り強く展開され、天野も勤儉貯蓄の必要性を説いたのであった。1902年に天野は『経済学綱要』を公刊し、資本の増分（投資）と貯蓄のバランス、銀行の機能等を極めて明快に議論した。また、天野は1891年に米ラフリン版（Mill 1884）を『高等経済原論』と題して訳出しており、ミルを土台にした経済学教科書の多様性も実感していたに違いない。

天野為之の『経済学綱要』（1902）は、『経済原論』（1886）以来の経済学の実展と応用を詰め込んだ書物である。『経済学綱要』は七篇構成で一部を現代用語に置き換えれば、(1) 総論、(2) 財の生産（生産の3要件）、(3) 財の分配（賃金、利潤、地代）、(4) 財の交換（価格、通貨）、(5) 財の消費、(6) 経済政策、(7) 財政（租税、公債及び予算）となる。総論の冒頭では、経済学が定義される。

経済学とは何そや、経済学とは財の生産、分配、交換、消費を論するの科学なり (p. 1)

現代のマクロ経済学の授業においてならば、一国内の経済循環を想定し、生産、流通・分配、消費の簡単なモデルを使って、GDP（国内総生産）を説明することになるだろう。天野は生産の3要件として、「自然（天然）」、「労働」、「資本」を挙げ、「自然」は主に土地からなるとした。

本稿では近代的銀行の機能についての議論に近づきたいが故に、天野の資本の定義に注目しよう。天野の資本の定義は柔軟で、物財、金銭、いずれの形態も取りうるものが要点である。そして彼は、資本の増加を貯蓄と結び付けていく。

資本は生産に使用せられ居る生産物及び之に代ふる目的を以て貯蓄せらるる財なり。例へば一の工場に於ける機械、道具、原料等は生産に使用せられ居る生産物にして資本なり、然れども資本は此種の生産物に止まらず苟しくも之に代へんと目的を以て貯蓄し居るものはその金銭たり、商品たり、何たるを問はず皆資本なり。(p. 13)

続けて、天野は、機械、器具、家屋、工場のごとく固定資本と、燃料、原料、給料のごとく流動資本を明確に区別している。

では、資本の増加に関わる原因は何か。天野は6つの原因をあげ、第1は「領土の与奪」、第2は「資本の国際的出入」とした。第3は「自由収入の多少」で、現在では「所得あるいは可処分所得の多少」で、収入や所得が大きければ貯蓄も増える、と翻訳できる。

第三自由収入の多少、但し自由収入とは人がその所得の内にて総へて必要欠く可からざる費用を支弁し猶ほ余す所の部分 自由収入少なくんば如何に貯蓄をなさんとするも能はず、日本の労働者の貯蓄少なきはその貯蓄心の乏しきに由るもその所得の少なく、自由収入亦従て少なきにも由る (pp. 29-30)

天野の資本増加にかかわる第4原因は「貯蓄心」で、「貯蓄性向」と翻訳することができ、さらに、その高さは知識や家族愛に依存すると考えられた。

第四は貯蓄心なり。夫れ資本は貯蓄の結果なれば国民に貯蓄心少なければ資本の増加少なきこと勿論なり。而して貯蓄心に大小ある原因は、(甲) 智識の多少。智識ある者は将来の計をなすに由り貯蓄心大なり、(乙) 道德心の多少、夫れ道德は博愛にして之を小にしては家族親戚を愛し、之を大にしては一国を愛し、世界を愛す、而して実際に道德を施さんとするは大抵の場合には金銭を要す、故に道德心の大なる国民にありては貯蓄亦た自ら盛なり。(p. 30)

貯蓄心に影響を与える要因(乙)には、二宮尊徳の思想と重なる部分があるといえる(池尾 1988: 77)。

天野の第5原因は、「利息の多少、資本の利息多ければ国民の貯蓄心を増す」ということで、利子率であった。彼が数学を使えば、利子率を調整変数と捉えたことであろう。

天野の第6原因は銀行などの金融機関の経営状態、信用状態であり、貸付可能資金の調整役としての社会的役割を期待したのである。彼は日本の状況を反映させて、銀行だけではなく、郵便貯金制度にも注目した。

第六信用機関の状態、夫れ銀行なり、郵便局なり、それぞれ貯金の制度整頓し居る場合には国民は安じてのその貯金をなし遂に資本の増加を来す。夫れ社会には財を蓄積すれども之を生産に使用する能はざるものあり、又之を生産に使用する力あれども蓄積したる財を有せざる者あり、安全なる貯蓄機関は此両者の媒介となりて資金の貸借を助け、国民の貯蓄を変して一国の資本となし以てその分量を増加するの機関なり。(pp. 30-31)

すなわち、貯蓄と資本の増加(投資)を調整するメカニズムを銀行・金融制度

(郵便貯金を含む)が担うと、捉えられている。ケインズの表現を使えば、「セイ法則」(供給はそれ自らの需要をつくる)が受け入れられているのである。

第4編「財の消費」に、「ケインズに先行するケインズ理論」を日本に誕生させた言明が見出される。まず、天野の消費の定義を見ておこう。

消費は財の使用を云う。而して生産の目的は消費、即ち使用にあり。故に如何なる物品と雖も消費せられざるはなし (p. 107)

生産の社会的目的は消費財を増やすこと、今ではサービスも消費財に含まれるので、消費活動を活発にすること、となる。そして天野によれば、浪費家(散財家)も蓄財家も、消費活動の活発化に貢献し得るのである。

散財家…己れの資産を抛(なげ)ちて贅沢品を買ふに由り、為にその需要を増し、之を作る労働者に職業を与ふ。(p. 116)

蓄財家と雖も決して正金を保蔵するにあらず、或いは之を以て或る事業に放下し居るか、然らずんば之を銀行に預け居るに相違なし。銀行に預け入れたる者は銀行の手を経て社会の金融を資け居るや明らかなり。然らば即ち蓄財家の資産は社会に活動して労働を買ひ物品を買ひ居るなり。これを察せず、徒に蓄財家を以てその財を保蔵し居る者となすは誤まれり。(pp. 116-117)

J. S. ミルがイギリス古典派経済学の伝統に従い、「生産的消費」と「不生産的消費」を区別する議論を続けていたのだが、天野は1886年の「経済学の必要」と『経済原論』でその議論を批判して、一歩先に歩み出した。そして、『経済学綱要』では、それを「謬論」として退け、贅沢品の消費の増加は贅沢品を生産する労働者に仕事を与える一方で、蓄財も銀行を通して行われるので、社会

的には資本の増加につながるはずであると捉えられた。贅沢品への支出であれ何であれ、消費活動が増えれば、ケインズの言うように、企業にとっては商品の売れ行きが伸びることになるので、現在の生産および将来の生産能力を伸ばす実物投資の増加につながり得る。そればかりではなく、貯蓄が増えれば、銀行など近代的金融制度を通じて、社会に配分される貸付可能資金が増加するので、企業は投資をしやすくなるはずである。つまり銀行などが資金を融通するという社会的役割を担っているので、「貯蓄のパラドックス」は起こらない。天野の『経済学綱要』には、ケインズの新理論とそれ以前の理論の両方が、「一般論」を論じる形で併論された。つまり、ケインズの革新的理論を含む（「消費の増加は、生産と投資を増やしうる」）と、ケインズが批判したセイ法則に基づく理論の両方が盛り込まれていたのである。

ケインジアン蔵相となった石橋湛山は経済学の勉強をするにあたって、天野の『経済学綱要』を読むことから始めた。「日本のケインズ」高橋是清も天野に英語を教えただけでなく、比類なき読書家であったことを鑑みれば、天野の『経済学綱要』を読むか、あるいは、兩人とも東京に住んでいたのであるから直接話を聴いたに違いない。天野は、日露戦争（1904年2月～1905年9月）を遂行するための資金調達にあたって、高橋が極秘に行った外債募集の手腕を評価し、その功績を讀える雑誌記事を終戦1年後の1906年9月に書いている（天野 1910: 151-153）。これは両者が緊密に連絡を取っていなければ書けない記事である。

3.7 高橋是清と石橋湛山

では、既に百回以上は紹介されてきたことであろうが、高橋是清と石橋湛山の「ケインズに先行するケインズ理論」たる主張を確認しておこう⁽²²⁾。

(22) 日本においてケインズが議論された状況についての詳細や関連文献は、Ikeo (1997)、池尾 (2006: 第6章)、池尾 (1994: 第11章) 等を参照されたい。

高橋是清は1929年11月に、旧平価での金解禁をめざす緊縮デフレ政策の一環である節約キャンペーンを次のように批判した。

例へば茲に1年5万円の生活をする余力のある人が、儉約して3万円を以て生活し、あと2万円は之れを貯蓄する事とすれば、其の人の個人経済は、毎年それだけ蓄財が増えて行つて誠に結構な事であるが、是れを国の経済の上から見る時は、其の儉約に依て、是れ迄其の人が消費して居つた2万円だけは、どこかに物資の需用が減る訳であつて、国家の生産力はそれだけ低下する事となる。故に国の経済より見れば、5万円の生活をする余裕ある人には、それだけの生活をして貰つた方がよいのである。(高橋「所謂緊縮政策に就いて」(1929); 高橋 1936: 248-49)

石橋湛山は偶然、犬養新内閣が金の輸出を再禁止した翌日と翌々日、つまり1931年12月14-15日に、JOAKのラジオ番組で「消費経済と生産経済」と題する講話を流したのであった。

世の中の人には、…消費は道徳的に悪い事、物を無くすマイナスの行為だとばかり思っているのであります。そこで成るべく消費を減じ、所謂貯蓄をしなければならぬと申します。之は一個人としては或程度無条件に真理だと云うても宜しいが、社会全体としては条件なしには承認し得ない事であります。何んな条件かと申しますれば、貯蓄は其れに依つて残した金を、唯だ積んでおいたのでは有害無益である、それは必ず新たな生産設備を作ると云う形で矢張使われねばならないと云う条件であります。若しそうではなく唯だお金を使わないで積んで置く、そして大に貯蓄したと社会全体の人が考えていますと、今まで流通していたお金の中、それだけが、銀行の庫の中なり個人の銭入の中なりに隠れて、世の中に出ないことにな

りますから、即ち物は売れなくなり、物価は下落し、従って総ての物の生産者は利益がなくなり、或は損失をするに至ります。故に其等の生産者は、致し方なく工場の仕事を縮小する、使用せる人を減らす、賃金を下げると云うことになり、ここに社会は所謂不景気の現象を呈します。昭和4年以来浜口及若槻内閣の取られた緊縮節約政策なるものは、即ちこれであったのであります。(石橋 1971, 第8巻: 498-99)

ラジオの普及はラジオ放送の展開と足並みを揃えており、1920年代に急速に進んだのであった。天野が活躍し始めた頃は、市販書籍や通信教育の教科書が、専門知識の普及にもっぱら貢献していたことは何度でも強調しておこう。

高橋や石橋は、ケインズが主張する以前に「貯蓄のパラドックス」などケインズの新理論の要点を把握して自分たちの主張をサポートするのに用いていたことは今では広く知られている⁽²³⁾。しかし、経済学者ではなかった2人に、なぜそれが可能だったのか、依然として謎として残っていた。彼らは、天野の経済学に依拠していたに違いないのである。天野は、資本の増分（投資）と貯蓄が銀行仲介の金融メカニズムによりバランスすべきことを見抜いていた点で、この2人より先行していたのであった。「貯蓄のパラドックス」を強調するか、「セイ法則」を強調するか、それは政治的判断である。一旦どちらかを選択してしまうと、政治的判断が白日のもとに晒されるので、天野の一般論を参照したとはなかなか正直には言えなかったことであろう。

4. 天野為之の再評価のために

本稿では、天野為之の「マクロ経済学」形成における先駆的な活躍に光をあ

(23) 石橋湛山は1946年5月の吉田内閣成立とともに、大蔵大臣に就任し、その就任演説で自らをケインジアンと呼んで、ケインズ理論を経済再建過程に応用すべく復興金融公庫融資を断行した。その政策はM. ブロンフェンブレナーを含むアメリカ人達からインフレ政策との批判を受け、1947年5月に連合国占領軍総司令部の命令により石橋は公職追放された(池尾 2011b)。

ることができた。天野はハーバードの経済学者チャールズ・ダンバーと同様に、経済における銀行の役割に注目していた。天野はさらに現代の「マクロ経済学」に極めて接近したのであるが、現代でも、マクロ経済学それ自体で、信用創造以外の銀行の機能が説明できるわけではない。天野の生きた時代とそれ以降においても、交通、情報通信の分野において飛躍的な進展があり、それが銀行業全般に大きな変化、時として革命的变化を及ぼしてきたことに鑑みると、産業化が始まって以降、人類は常に銀行業の変貌とともに不安定性にも悩まされているのであろう。それでも銀行業は、近世に比べると、資金融通を飛躍的に効率化することによって、それ以前には想像もできなかったほどの富を人類に提供することに貢献してきたのである。「マクロ経済学」は貯蓄-投資による分析枠組みを提供することによって、銀行業が引起す問題の種類を分析するための参照枠組みとして役に立ち続けているのではないだろうか。

2011年には、天野にまつわる行事が2つあった。3月19日の「天野為之シンポジウム」(唐津)²⁴⁾と、9月7日-10月8日の早稲田大学史資料センター主催「天野為之と早稲田大学展」(大隈記念タワー)である。そして、木下恵太(大学史資料センター)の「天野為之について」もウェブ上に公表され、天野再評価の期待が高まっている——「天野は建学の祖である大隈重信・小野梓を助け、大学の礎を築いた『早稲田四尊』—高田早苗・坪内逍遙・市島謙吉・天野為之の一人に数えられる」(木下 2011)。しかし、天野の活躍はそれだけにはとどまらない。本稿では、マクロ経済学者としての天野を再評価することができたが、経済ジャーナリスト・経済政策の論客として活躍した天野、商科設立を提唱した天野、民間教育の普及に貢献した天野、多方面からの天野再評価が進

24) 天野為之記念シンポジウムは、島善高・早稲田大学社会科学総合学術院教授の基調講演「早稲田大学と唐津の偉人たち」とシンポジウム「天野為之が遺したこと」から構成された。パネリストは、横山将義・早稲田大学商学学術院教授、角田昭・元(株)東洋経済新報社常務取締役、宮島清一・宮島醤油(株)代表取締役、コーディネーターは、土田健次郎・学校法人大隈記念早稲田佐賀学園理事長であった。

むように、今後の広範な研究の展開を祈念してやまないのである。

後記 本稿は、2011年度商学部徳井研究振興基金による研究成果の一部である。なお、本稿執筆開始にあたり、横山将義・早稲田大学商学学術院教授から貴重な御教示を得たことを、記して感謝する。また本稿で詳細な研究を展開するにあたっては、リチャード・スメサーズ氏（高橋是清伝の著者）の激励があったことを記しておく。彼は「高橋是清に知恵を授けた経済学者が誰かいるはずだ」と考えていた。海外の日本研究者の間では、前田正名（1850－1921）などの可能性も浮上したようだが、前田や他の経済官僚の場合についても、今後は天野の経済学の普及・共有を視野に入れて研究されるべきであろう。最後に、最終草稿を読んで誤りを指摘しコメントをくださった川口浩氏、中村宗悦氏、上久保敏氏に感謝する。もし誤りや勘違いがまだ残っているならば、それは筆者の責任である。

天野為之の経済著書・論文・講述書

- (1886a)「経済学の必要」『中央学術雑誌』(21): 1-8 & (22): 19-24.
- (1886b)「銀行原理」(東京専門学校講義録)『中央学術雑誌』(21)－(35)連載
- (1886c)『経済原論』富山房、複製版、早稲田大学、1961年.
- (1886d)『商政標準』富山房.
- (1890a)『経済学研究法』(政治学経済学法律学講習全書の内)博文館.
- (1890b)『銀行論』(坪内善四郎編修)博文館.
- (1891)『高等経済原論』(ジェー・エス・ミル原著／ジェー・エル・ラフリン編、天野為之訳)富山房.
- (1896)『経済学研究法』(ケアンズ著)東京専門学校出版部
- (1901)『勤儉貯蓄新論』(講義)寶永館書店 東洋経済新報社.
- (1899)『財政学』(コーン著、天野為之訳)富山房.
- (1902)『経済学綱要』東洋経済新報社.
- (1910)『経済策論』実業之日本社.

東京専門学校または早稲田大学出版部発行講義録（明治期 出版年次不詳）――

『経済原論』、『銀行論』、『経済学研究の方法』、『為替論』、『経済史』、『公債論』、『公債論』（アダムス原著）、『経済学の性質』（コッサ原著）、『商政論』、『外国為替論』、『外国貿易論』、『米国租税論』、『貨幣論』

早稲田大学出版資料

大学史編集所（1978）『早稲田大学百年史』第1巻、早稲田大学出版部.

商学同攻会編（1996）『早稲田大学商学部九十年史』早稲田大学商学同攻会。
 『早稲田学報』（1961年10月号）「天野爲之先生生誕百年記念特集」
 『早稲田大学図書館紀要』第4号（1962.12）-第6号（1964.12）「天野爲之雑誌論文総目録」
 商学部百年史編集委員会（2004）『早稲田大学商学部百年史』早稲田大学商学部。

参考文献

- 浅川榮次郎・西田長壽（1950）『天野爲之』実業之日本社。
- Cairnes, John Elliott (1875) *The Character and Logical Method of Political Economy*. Second edition. London: Macmillan and co., and New York: Harper. First edition, 1880. 伴直之助訳・田口卯吉校閲『経済要義』東京：経済学講習会，1884年。東京：経済雑誌社，1889年。
- 長春男・住谷一彦編（1969）『近代日本経済思想史』Ⅰ，Ⅱ，有斐閣。
- Church, Robert I. (1965) 'The economist study society: Sociology at Harvard, 1891-1902'. Paul Buck ed. *Social Sciences at Harvard, 1860-1920: From Inculcation to the Open Mind*. Cambridge, MA: Harvard University Press, pp. 18-90.
- Cossa, Luigi (1880) *Guide to the Study of Political Economy* (Translated from the 2d Italian ed. With a preface by W. Stanley Jevons). London: Macmillan and co.
- Dorfman, Joseph (1949) *The Economic Mind in American Civilization*, volume 3. New York: Viking Press. Reprint, New York: A. M. Kelley, 1969.
- 福田徳三（1927）「田口全集の刊行に際して——福沢・田口・天野と明治の経済論——」『我等』9(6): 28-32.
- 福住正兄筆記（1893）『二宮翁夜話：報徳教祖』静岡：報徳図書館。福住正兄筆記・佐々井信太郎校訂（1941）『二宮翁夜話』岩波書店。
- 藤井隆至編（1998）『日本史小百科 近代経済思想』東京堂出版。
- 藤原洋二・立脇和夫（2004）「部門別学問発達史：金融論」商学部百年史編集委員会（2004），pp. 226-246.
- Gramlich-Oka, Bettina and Gregory Smits eds (2010). *Economic Thought in Early Modern Japan*. Leiden and Boston: Brill.
- 平田富太郎（1957）「天野爲之——古典学派経済学の先駆者——」早稲田大学創立75周年記念出版社会科学部門編纂委員会編『近代日本の社会科学と早稲田大学』早稲田大学。
- 堀経夫（1933）『明治経済学史』弘文堂書房。
- 堀経夫（1975）[1991]『明治経済思想史』増訂版，日本経済評論社。
- Hume, David (1948) *Hume's Moral and Political Philosophy*, edited with an introduction by Henry D. Aiken. New York: Hafner Press.
- Ichimura, Shinichi (2010) 'A historic survey of macroeconomic models in Japan'. In *Macro-Econometric Analyses of the Japanese Economy*, edited by S. Ichimura and L. R. Klein. Singapore: World Scientific, pp. 1-29. 市村真一・ローレンス・R. クライン編著『日本経済のマクロ計量分析の歴史』日本経済新聞社，2011年。
- 池尾愛子（1988）「貯蓄の理論的物語とその歴史」貯蓄経済研究センター編『おカネと豊かさ——歴史的，経済的，社会的アプローチ』郵便貯金振興会，pp. 41-86.
- 池尾愛子（1994）『20世紀の経済学者ネットワーク——日本からみた経済学の展開』有斐閣。
- Ikeo, Aiko (1997) 'Keynes and Keynesian economics in pre-WWII Japan.' 『日本文化研究所紀要』(80): 271-308.
- 池尾愛子（2006）『日本の経済学——20世紀における国際化の歴史』名古屋大学出版会。
- 池尾愛子（2008）『赤松要——わが体系を乗り越えてゆけ』日本経済評論社。

- 池尾愛子 (2011a) 「天野為之 (1859-1938) と早稲田大学 (商学部) ——『マクロ経済理論』と諸制度への実学的アプローチ——」日本経済思想史研究会, 佐賀大学大会, 6月4日(土) - 6月5日(日).
- 池尾愛子 (2011b) 「M. ブロンフェンブレナーと戦後日本経済の再建 (1947-1952年)」『日本経済思想史研究』(11): 39-56.
- Ikeo, Aiko (2011) 'A history of Japanese developments in econometrics'. *Histories on Econometrics*, annual supplement to volume 43, *History of Political Economy*, edited by Marcel Boumans, Arian Dupont-Kieffer, and Duo Qin. Durham, NC: Duke University Press.
- 井上琢智 (2006) 『黎明期日本の経済思想』日本評論社.
- 石橋湛山 (1950) 「天野為之伝」『東洋経済新報』7月1日, 8日, 15日, 22日. 『石橋湛山全集』第13巻, 東洋経済新報社, pp. 556-573.
- 石橋湛山 (1951) 『湛山回想』毎日新聞社. 『石橋湛山全集』第15巻, 東洋経済新報社, pp. 3-242, 1972年. 頁数は全集版による.
- 石橋湛山 (1971) 『石橋湛山全集』第8巻, 東洋経済新報社.
- 上久保敏 (2003) 『日本の経済学を築いた50人: ノン・マルクス経済学者の足跡』日本評論社.
- 川崎勝 (2011a) 「田口卯吉の三菱批判」日本経済思想史研究会, 慶應義塾大学, 12月17日.
- 川崎勝 (2011b) 「田口卯吉の『私利心』——最初の著作『自由交易日本経済論』と『日本開化小史』を中心に」『社会と倫理』(南山大学社会倫理研究所編) (25): 163-186.
- Keynes, J. M. (1923). *A Tract on Monetary Reform*. London: Macmillan. 岡部晋司・内山直訳『貨幣改革問題』岩波書店, 1924年. 中内恒夫訳『貨幣改革論』東洋経済新報社, 1978年.
- Keynes, J. M. (1930). *A Treatise on Money*. 2 volumes. London: Macmillan. 鬼頭仁三郎訳『貨幣論』全5巻, 同文館, 1952-53年. 小泉明・長沢惟恭訳『貨幣論Ⅰ』, 長沢惟恭訳『貨幣論Ⅱ』東洋経済新報社, 1979-80年.
- Keynes, J. M. (1936). *The General Theory of Employment, Interest and Money*. London: Macmillan. 塩野谷九十九訳『雇用, 利子および貨幣の一般理論』東洋経済新報社, 1941年. 塩野谷祐一改訳, 1983年.
- 木下恵太 (2011) 「天野為之について」YOMIMURI ONLINE.
<http://www.yomiuri.co.jp/adv/wol/culture/110914.htm> 2012年1月29日アクセス
- 国立国会図書館 (2006) 「国立国会図書館関西館の電子サービスの展開」『国立国会図書館月報』(542): 1.
- 小林惟司 (1989) 『日本保険思想の生成と展開』東洋経済新報社.
- 前橋孝義訳 (1885) 「経済上快樂苦痛の尺度を論ず: せぼん氏経済論」『中央學術雑誌』(1): 23-25, (2): 21-23.
- Mandeville, Bernard (1714) *The Fable of the Bees, or, Private Vices, Public Benefits*. London: Printed for J. Roberts. Indianapolis: Liberty Classics, 1989. 泉谷治訳『蜂の寓話: 私悪すなわち公益』(正), 法政大学出版局, 1985年. (続) 法政大学出版局, 1993年.
- 松野尾裕 (1996) 『田口卯吉と経済学協会: 啓蒙時代の経済学』日本経済評論社.
- Mason, Edward S. and Thomas S. Lamont (1982) 'The Harvard Department of Economics from the beginning to the World War II'. *Quarterly Journal of Economics*, 97(3): 383-433.
- Mill, John Stuart (1848) *Principles of Political Economy: with some of their applications to social philosophy*. London: J. W. Parker. The sixth edition, 1865.
- Mill, John Stuart (1870) *Principles of Political Economy: with some of their applications to social philosophy*. The fifth edition. New York: D. Appleton and Company.
- Mill, John Stuart (1871) *Principles of Political Economy: with some of their applications to social phi-*

- losophy*, The seventh edition. London: Longmans, Green, and Co. 末永茂喜訳『経済学原理』全5巻, 岩波書店, 1959-63年.
- Mill, John Stuart (1884) *Principles of Political Economy*, abridged, with critical, bibliographical, and explanatory notes, and a sketch of the history of political economy by J. Laurence Laughlin, New York: D. Appleton. 天野為之訳『高等経済原論』富山房, 1891年.
- Mill, John Stuart (1902) *Principles of Political Economy: with some of their applications to social philosophy*, edited with an introduction by Sir William Ashley New edition, London: Longmans, Green, 1909. (New York: A. M. Kelley, bookseller, 1965.)
- 宮島英昭・花井俊介 (2004) 「商学部沿革史 (1) 創立から第二次大戦まで」商学部百年史編集委員会 (2004), pp. 2-95.
- 中村宗悦 (1998) 「田口卯吉」「フェノロサ」「天野為之」藤井隆至編 (1998)
- 日本銀行金融研究所 (1993) 『日本金融年表 (明治元年～平成4年)』日本銀行金融研究所.
- 老川慶喜 (1998) 『『東京経済雑誌』』藤井隆至編 (1998)
- 大淵三洋 (2008) 『イギリス正統派の財政経済思想と受容過程』学文社.
- 岡田純一 (1975) 「経済学者としての天野為之——日本における経済科学の創始——」『早稲田商学』(249): 43-66.
- Omori, Ikuo (1998) 'For diffusing economic knowledge: Tokyo Senmon Gakko (Waseda)' in Sugiyama and Mizuta (1988).
- 大谷孝一 (2012) 「損害保険研究の諸問題」(最終講義) 早稲田大学, 1月12日.
- 大園隆二郎 (2005) 『大隈重信』(西日本人物誌) 西日本新聞社.
- Ravina, Mark J. (2010) 'Confucian banking: The community granary (Shaso) in rhetoric and practice'. In Gramlich-Oka and Smits (2010), pp. 179-204.
- Schaede, Ulrike (1989) 'Forwards and futures in Tokugawa-period Japan: A new perspective on the Dojima rice market'. *Journal of Banking & Finance*, 13: 487-513.
- Seligman, Edwin R. A. (1905) *Principles of Economics, with special reference to American conditions*. New York and London: Longmans, Green, and Co. 第4版からの翻訳, 石川義昌訳『経済原論』巖松堂書店, 1912年.
- 島善高 (2011) 「大隈重信」(佐賀偉人伝) 佐賀県立佐賀城本丸歴史館.
- 嶋村絃輝・横山将義・鶴飼信一・大森郁夫・中村清・宮下史明・横田信武 (2004) 「部門別学問発達史: 経済学」商学部百年史編集委員会 (2004), pp. 275-293.
- Smethurst, Richard J. (2007) *From Foot Soldier to Finance Minister: Takahashi Korekiyo, Japan's Keynes*. Harvard East Asia Center. 鎮目雅人・早川大介・大貫摩里訳『日本のケインズ——その生涯と思想』東洋経済新報社.
- 末永茂喜 (1959) 「訳者より」. 末永茂喜訳ミル『経済学原理』第1巻, 岩波書店, 3-11.
- 杉原四郎 (1973) 「フェノロサの東京大学講義—阪谷芳郎の筆記ノートを中心として—」『季刊社会思想』2(4): 1037-1053.
- 杉原四郎 (1987) 『日本の経済雑誌』日本経済評論社.
- Sugihara, Shiro (1988) 'Economists in journalism: Liberalism, nationalism and their variants' in Sugiyama and Mizuta (1988).
- 杉原四郎 (1990) 『日本の経済思想家たち』日本経済評論社.
- 杉原四郎・岡田和喜編 (1995) 『田口卯吉と『東京経済雑誌』』日本経済評論社.
- Sugiyama, Chuhei and Hiroshi Mizuta eds (1988). *Enlightenment and Beyond: Political Economy Comes to Japan*. University of Tokyo Press.
- 杉山和雄 (1998) 「天野為之」. 原輝史編『早稲田派エコノミスト列伝』早稲田大学出版部, pp. 43-71.

- 高橋是清口述（1929-30）『高橋是清一代記』上下，上塚司編，大阪：朝日新聞社。
- 高橋是清（1936）『高橋是清自伝』上下，上塚司編，再版，中公文庫，1976年。
- 高橋是清（1936）『随想録』千倉書房。
- 東京大学百年史編集委員会（1986）『東京大学百年史 部局史1』東京大学。
- Wakita, Shigeru (2001) 'Efficiency of the Dojima rice futures market in Tokugawa-period Japan'. *Journal of Banking & Finance*, 25: 535-554.
- 山口静一（2000）「御雇外国人教師エルネスト・F・フェノロサー序に代えて一」．山口編（2000），pp. 7-38.
- 山口静一編（2000）『フェノロサ社会論集』京都：思文閣出版。
- Yamaguchi, Seiichi (2000) *Ernest Francisco Fenollosa: Published Writings in English*, 3 volumes. Tokyo: Edition Synapse.
- 国立国会図書館 近代デジタルライブラリー <http://kindai.ndl.go.jp/> 2012年3月30日アクセス
- イギリス王立経済協会 Royal Economic Society <http://www.res.org.uk/> 2012年4月8日アクセス